

7 自動化、省力化の盲点

- 自動化、省力化は事故防止に貢献
- 巨大な空間に人が極端に少ないと、事故時の対応に時間がかかる
- ボヤで済む火災が大火災に発展
- 本来は工程の自動化の際に、自動消火などの対策をすべき
- 正確なリスク評価なしに、工程の自動化のみ推進

評価をすれば、工程の自動化の際に自動消火の対策を講ずるとか、建築基準法でいくら大空間が認められていても、やはり千平方メートルぐらいずつで仕切っておこう、などと、自動化をする際に並行していろいろな安全対策を講じて当然なのです。それが、きちんとリスク評価をしないで工程の自動化だけを推進してしまうと、ブリヂストンのようなことが起きてしまうのは、当たり前といえば当たり前です。

日本型の安全システムの崩壊を直視すべき

産業災害が急増している原因をいろいろ紹介しましたが、「日本型の安全システムの崩壊」については、もう崩壊しているところと、まだ崩壊していないけれどこれから起こりそうだ、というところ、これからはそんなことは絶対起こらない、と自信があるところなど、いろいろあると思います。

ただ、私としては、日本全体として、古き良き日本型システムが崩壊してきている、ということをもっと直視すべきだと思っています。

日本は、現場作業員の質の高さと企業への帰属意識の高さに頼って安全システムを作り上げ、世界一の安全レベルを実現してきたのだと思うのですが、その前提が崩れた、あるいは崩れかけているということを直視すべきだと思っています。

言い換えれば、現場作業員の能力だとか、勤勉とか律儀だとか、放っておいてもきちんと改善するとか、会社第一だとか、そのようなことを前提としないで安全システムを作っていかなければならない、ということだと思います。

日本型安全システムの崩壊を直視すべき

- 日本は現場作業員の質の高さと企業への帰属意識の高さに頼った安全システムを作り上げ、世界一の安全レベルを実現
- その前提が崩れたことを直視することから始めるべき
- 現場作業員の能力、勤勉、律儀、自律的改善意欲、会社第一……を前提とせずに、安全を確保する仕組みをどう作るか

新たな安全システムの構築に向けて

新たな安全システムの構築に向けて、どのようにすればいいのかということですが、一つは「トップの意識改革」、これは当然でしょう。「本質安全の徹底」、「システム設計による安全対策の徹底」、「マニュアル化の徹底」、「チェック体制の徹底」……「徹底」ばかり書いてありますが……。

「契約とルールによる責任の明確化」とか、「アウトソーシングを前提とした社内や協

新たな安全システムの構築に向けて

- 1 トップの意識改革
- 2 本質安全の徹底
- 3 システム設計による安全対策の徹底
- 4 マニュアル化の徹底
- 5 チェック体制の徹底
(契約とルールによる責任の明確化)
- 6 アウトソーシングを前提とした、社内や協力企業を対象とした資格制度の整備
- 7 委託・請負契約の条件整備
- 8 事故情報の共有

力企業を対象とした資格制度の整備]、「委託請負契約の条件整備」、「事故情報の共有」などいろいろあります。特にトップの意識改革は非常に重要です。防災対策を「長期的に見たリスクの回避」という視点でとらえ、その上で人材と資金を防災対策にどのように配分すべきかと考える必要があります。

それから、みんながやるのだったら、防災対策の費用は価格に転化できるのではないか、

というのが私の考えです。例えば、石油タンクの耐震対策については、日本中の石油タンクで同じように耐震対策をやるわけですから、その費用は価格に転化できると私は思うのです。

ガソリンがリッターあたり0.5円分ぐらい高くなっても、日本中の石油タンクがみんな耐震対策ができるなら、国民的な合意ができるのではないかとわたしは思うのです。

「地震対策は、莫大な費用がかかるからできない。今みたいな時期にそんなことできるわけじゃないか。」というところが多いのですが、かかった費用を全部価格に転嫁できるなら問題はないのではないかと、と思います。

東海地震は、近い内に絶対起きます。東南海、南海地震もそう遠くない将来、絶対起きます。南関東直下の地震はいつどこに起きるのかよくわかりませんが、これも今世紀中には必ず何回か起きます。

絶対地震が起きるとわかっているのに、そのまま放っておくということは、それだけでリスクを全然考えていないことと同じことです。

相模原のあたりも強化地域からは外れているようですが、同じような揺れが多分あると思いますので、それにどのように答えるかということが非常に重要だと思います。

本質安全の徹底

事故を起こそうとしても起こせないようなハード面の対策などを行って、その上でソフト対策やマニュアル化を行うのが、安全対策の王道だということです。

本質安全の徹底

- 事故を起こそうとしても起こせないようなハードの整備が第一
- その上で、コスト面からどうしてもハード対策を徹底できないものについて、システム設計の工夫とマニュアル化で対応

欧米型安全システムを越えて

欧米型安全システムを越えて

- ISO9000、ISO14000の考え方は参考になるがそれでは一周遅れ
 - 極めて高くつく
- ◎新たな日本型安全システムの構築は、次世代の教育から始めるべき

最後に、先ほど「新たな安全システムの構築に向けて」ということでいろいろお話をしましたが、よく考えるとどれも欧米型の安全システムです。欧米型の安全システムの考え方は、「現場作業員は何をするかわからない」、「自立的に安全対策を考えることはない」など、「現場の作業員を信用しない」ということを前提とした上で、システムを構築しています。それに対して、日本は、「いや、現場

の作業員は信用できる」としてやってきたのです。その結果、非常に安上がりで効果が高いシステムが出来たのですが、どうもそれがそうはいかなくなってきた。日本でも、現場作業員を信用できない、信用しないシステム、を作っていかなければならない。それはつまり欧米型になるしかない、ということかも知れません。

ただ、それは極めて高くつきます。しかも欧米に比べて一周遅れになってしまう。

ではどうしたらいいのでしょうか。

とりあえず欧米型でやるしかないと思っていますが、並行して、迂遠に見えるかもしれませんが、「次世代の教育」ということから始めるのだと思います。「律儀」という言葉が死語にならないような日本をもう一度作り上げていけば、日本の将来も見えてくるのではないかと考えています。

以上です。